

《二》 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

僕が小学生の時は些細なことが理由で、もしくは理由なく、小さなじめが比較的多くありました。「あいつを無視しよう」と誰かが言い、それに皆が同調してしばらくの期間口をきかず、しばらくすると何もなくたように元に戻るといふようなものです。僕もその対象になった経験があつて、ある日突然、誰も口をきいてくれなくなりました。具体的な出来事は覚えていませんが、戸惑いが整理できないまま押し寄せてくる不安や、悲しい気持ちの感触は今も残っています。ただ、僕がいた小学校では、対象を変えてこのようなことは年に数件①デイドは発生していたので、僕を無視したことを鮮明に覚えていた当時のクラスメイトはいないと思います。僕も無視する側となったことがあります、その対象が誰で、その時自分がどんな気持ちだったかはもう思い出せません。自分が無視の対象となった時の辛い感触は残っているというのに。

もともと長く続いていたじめもありました。その対象になっていた女子は、毎日同じ服装をしていて、それが皆から嫌がられてしまふ主な原因でした。ご家庭の経済的な事情か、それ以外の事情かは分かりません。でもなんにせよ、小学生であるその女子は、自分ではコントロールできない何かしらの事情によって、クラスという社会において、大多数と違いを持つ忌むべき存在と認識されてしまつていました。毎日同じ服装をしているので、「汚い」、「くさい」と言われ、「口をきくとフケツがうつる」とも言われていました。僕は違うクラスだったので、クラスの中でどれほどの状態だったか詳しくは知りませんが、違うクラスの僕でもその女子に対する周りからの認識を把握しているくらいでした。

例えば、彼女と廊下ですれ違った時、友人によつてはそれだけで「フケツがうつった」と言つて、「バリア」を意味するポーズをとる人もいました。そんな友人と一緒に彼女とすれ違ふと、当然のように「バリア」のポーズをしてきます。でも、なぜだか僕は、^Aそれに同調してポーズをとることはできませんでした。^②ゼンジュツした、自分が無視されたという辛い経験がどこかで重なつたからかもしれない、なんて今は考えそうになるのですが、そんな思慮深さが当時の自分にあつたとは思えません。ただ覚えているのは、彼女とすれ違った時にくさいと感じなかつたことと、くさいのに「くさい」とか「フケツ」と言つていいのかな？ という疑問のようなものです。疑問のようなもの、というのは、当時これが言葉になるに^③イタらない直観でしかなく、実際は「バリアしないとお前もフケツだぞ」と言う友人に対しては「いいじゃん別に」としか答えなかつたと思うからです。今でも僕は人から「ゆるい」と言われますが、小学生の時は自分の中でよく分からないことに対して「いいじゃん別に」と答える癖があつたので「いいじゃん別に人間」というあだ名がついていました。だからその時もそう答えて、いつものように「出たよ、いいじゃん別に人間！」と言われているはずなのです。

小学校6年の時には林間学校という初めての泊まり行事があり、そこでの最も大きなイベントはきもだめしでした。男女2人のペアになつて手をつないで夜の林間を歩くのですが、そのペアづくりは生徒同士で自由に決めるといふものでした。この自由なペアづくりはドキドキするような気もしますが、うまくペアをつくれな人にとっては全く楽しいことではありません。僕も、6年間想いを寄せ続けた人に^Xを決してペアを申し込みましたが、「星野は1番じゃないんだ……」というなんだか曖昧な言い方で、はっきりと断られました。これで指針を失い、くよくよしているうちにクラスで一人だけ余つてしまい、結局他のクラスで余つた人とペアになることになりました。その相手というのが先ほどの、^B皆から遠ざけられている女子でした。友人たちからは色々なことを言われました。「バリア」のポーズをしてくる人たちもやはりいました、僕としては彼女に対する印象は先ほど書いた通りだったので、ペアになつたことが悲しくも嬉しくもありませんでした。

きもだめしが始まります。彼女とは一度も同じクラスになつたことがなかつたし、嫌だと思つていなかったといつても周りからの目も意識せずにはいられず、どう接したらよいのかわからなくて緊張したのを覚えています。いざ出発の^④ダンカイになると「手、つながないでいいよ」と彼女が言いました。でも僕としてはそういうルールだし、なぜそんなことを言うのかその時は分かりませんでした。「え……」なんて言いながら僕が返答を探していると彼女は「私、くさいし」と続けました。でも、くさくありません。多分僕は、とにかく何か言わないといけないと思つて「くさくないし怒られちゃうから手をつなごう」という内容のことを言い、手をつないで林間を歩きました。その時の僕にとっては、ただ「くさくない」と感じたことと、ルールを守らないために「怒られたくない」と思つただけの行動だつたと思います。でも、きもだめしが終わった時、彼女に「ありがとう」と言われました。それで何というか、心が動いたのを覚えています。うまく言葉にできませんが、「感動」と定義される状態の、もつとずつとささやかなものだつたと思ひ

ます。なぜその状態になったのか。何かをしてあげたという種類の気持ちはないか、あったとしてもわずかだったと思うので、例えば診察で状態が良くなった患者さんが僕にお礼を言ってくれた時の喜びとは多分違います。でも、では何だろう。もしかしたら、彼女から言葉とともに発せられた気持ちのようなものに心が動いたのかもしれない。手をつながなくていいという彼女に対して、^D思慮深さは伴わずとはいえ、僕は手をつなぐという行動で返答しました。その時の彼女の気持ちを想像すると、きっと小さくはない心の動きがあったのだろうと今では思えます。そしてその動きが「ありがとう」に乗って、僕も心を動かされたのではないのでしょうか。この、相手の何かしらに対して反応をし、その反応に対してまた相手から反応が返ってくる形は「対話」の形です。

大昔のこの出来事を通して、^E「バリア」と簡単に断絶しないことで成立する対話の形を、僕は初めて体感しました。この体感^⑤はイコウの自分の人生の静かな分岐点となっているような気がします。

(星野概念『静かな分岐点』)

問一 傍線部A「それに同調してポーズをとることはできませんでした」とありますが、それはなぜですか。六十字以内で説明しなさい。

問二 空欄Xに入る適切な漢字一字を書きなさい。

問三 傍線部B「皆から遠ざけられている女子」とありますが、彼女が遠ざけられていた理由を現在の筆者はどう考えていますか。次の中から最も適切なものを一つ選び、符号を書きなさい。

- イ 「あいつを無視しよう」という誰かの言葉に反発したから。
- ロ 家が貧しく、毎日同じ服装なので、汚くてくさかったから。
- ハ 「バリア」のポーズをされても、平気で無視していたから。
- ニ やむをえぬ事情で、クラスの中で大多数と違っていたから。
- ホ 自分勝手に、言動が乱暴で、人の話を少しも聞かないから。
- ヘ 自分から「バリア」のポーズをして、皆をさけていたから。

問四 傍線部C「手、つながないでいいよ」と言ったのは、彼女がどのように思ったからだと考えられますか。七十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部D「思慮深さは伴わず」とありますが、具体的にはどうであったことをそう言っているのですか。次の中から最も適切なものを一つ選び、符号を書きなさい。

- イ くさくなるけど別にいいじゃないかと思って手をつないだこと。
- ロ 好きな人に断られたショックでやけになって手をつないだこと。
- ハ 友人たちから色々なことを言われ、反発して手をつないだこと。
- ニ 自分が無視されていた辛い経験を思いだして手をつないだこと。
- ホ ルールを守らないで怒られるのが嫌なだけで手をつないだこと。
- ヘ 皆に嫌がられているのをかわいそうに思って手をつないだこと。

問六 傍線部E『「バリア」と簡単に断絶しないことで成立する対話』とありますが、それはどういうものですか。八十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

《二》次の文章は、ささきありの小説『天地ダイアリー』の一節です。中学一年生の「ぼく」は、栽培委員会に所属しています。これを読んで、後の問いに答えなさい。（字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。）

菊池さんは、ぼくと阪田の顔を見た。

「買い出し、行くよね？」

ぼくは「え……」と、言葉をつまらせた。

正直に言うのと、帰りたい。

中学校生活は、あれもこれも慣れないことばかり。アンテナをたてて集中をきらさないようにして、もうへとへとだった。けど、ここで足並みを乱すようなことをしたら、まずいよな。

ぼくは気が乗らないながらも、うなずいた。

「うん、行こうかな」

ところが、阪田はあっさり断った。

「おれは帰る」

菊池さんが **A** をとがらせた。

「えー、なんで？」

「全員参加じゃないんだから、いいだろ」

「そういうの、よくないよ。みんながやっているんだから、いっしょにやろうよ」

阪田は菊池さんから目をそらして、舌打ちした。

「つたく、めんどくせえな。 **①** を押しつけんなよ。そんなだから、ハブられるんだろっ」

菊池さんがびくつと、肩をふるわせる。

「おまえ、選抜メンバーに責められたうちの姉ちゃんをかばおうとして、上級生に食ってかかったんだろ。それで上級生にハブられたうえ、上級生のチクリを 鵜呑みにしたコーチにも、なまいきなやつってレッテル貼られてさ。おまえは脳まで筋肉だから、勢いで行動して失敗するんだよ！」

ミニバスケットボールクラブで起きた、トラブルのことだろう。阪田はまくしたてるように言い放つと、技術室を出ていった。

阪田はぼくに言ったわけじゃない。わかっているけど、ざくつと **B** に刺さった。クラスで不要とされた記憶がよみがえり、鼓動が速くなる。

菊池さんはうつむいて、こぶしをにぎりしめていた。あのころのぼくを見ているようで、直視できない。

わざわざ指摘すんなよ。わかってんだよ。だれのせいでもない、自分が悪いんだって。自分で勝手にからまわりして、孤立した。

ぼくはマスクに触れた。マスクに守られているのを、確かめたかった。

菊池さんが消えそうな声でつぶやいた。

「ごめん、わたしも帰る」

バタバタと技術室を出ていく。遠ざかる足音を聞きながら、ぼくは **C** を落とした。

学校からホームセンターまでは、歩いて十八分ほどだった。

外の木製デッキに、黒いビニールポットに入った植物が並んでいる。植物を眺めてまわっていると、ピンクの小さな星が集まっているような花が目にとまった。

そばにあった札に「ペンタス」184円、置き場「日なた」、耐寒温度「5℃」、開花時期「5月～11月」、「多年草」と、記されている。ほかの札にも、それぞれ名前と価格、置き場などの説明があった。

そうかと、札に見入る。

いまさらだけど、植物ってみんな同じ場所と季節で育つわけじゃないんだよな。日なたがいい植物もあれば、日陰がいい植物もある。同じ四月に咲き始めても、夏前に終わるものがあれば、秋まで咲き続けるものもある。

ふと、ぼくたちに重なるように思えた。

どんな環境でも順応できる人もいれば、ぼくみたいに、うまく順応できないやつもいる。きつと、菊池さんもそうだ。これまで菊池さんみたいに意見をはっきり言えるタイプは、どこでも自分の居場所をつくっていけるものだと思ってきた。けど、そうでもないようだ。

育つ環境が合わなかったら、枯れてしまうのかな……。

と、背後ではずんだ声が出た。

「あー、これもいいね。長く咲くし、安い！」

後ろにいたのは、川口センパイだった。

「涼音ー、これ、寄せ植えにいいんじゃない？」

呼ばれて、ほんわかせんぱいがやってきた。

「ペンタス。うん、いいね。白とピンクの両方を買って、ペチュニアと合わせようか」

ミッキー先輩もやってきて、「いいですね」と、うなずいた。

先輩たちは、ペチュニアのピンクと青紫の苗、ペンタスのピンクと白の苗を、それぞれ四株ずつ十六株買った。

「木下さん、これ持ってくれる？」

ほんわかせんばいに渡されたのは、二つのビニール袋。どちらも背の低いやわらかそうな葉の上に、アサガオを小ぶりにしたような花がいくつか見える。ぴらぴらしたペチュニアの花びらは頼りなく、ちよつと触れただけで傷つきそうだ。

弱々しくても、がんばって咲いたんだな……。

ぼくは自分の体に花びらがあたってつぶれないよう、両腕を広げて袋を持った。変に力を入れたせいで、歩き始めてすぐ腕と肩が痛くなる。

ぼくは信号で立ちどまるたびに袋をのぞいて、花びらの無事を確かめた。

「木下くん、ずいぶん慎重だねえ」

川口センパイに言われて、見られていたんだと、少しはずかしくなった。

「あ、えと、花がつぶれたら、まずいかと思って」

言い訳するようにもごもご答えると、川口センパイが笑った。

「そんなに気を遣うことないって。平気だよ」

「はあ」

ぼくは、相づちを打ったものの、腕の力をゆるめることができなかった。

ぼくたちが正門に着くと、花壇で作業をしていたしんちゃん先輩と近藤先輩、マジショー先輩が立ちあがった。

「肥料、混ぜたから、植えつけていいよ」

しんちゃん先輩の言葉に、ほんわかせんばいがうなずく。

「ありがとう。じゃあ、苗のポットを置いて、レイアウトを確認しようね」

川口センパイの指示で、ぼくたちは苗の入ったビニールポットを土の上に置いていった。正門向かって右側の花壇はピンク系とし、奥に星型のペンタスを四株、手前にアサガオ型の淡いピンクのペチュニアを四株置く。左側の花壇はブルー系として、奥に白のペンタスを四株、手前に青紫のペチュニアを四株置いた。

しんちゃん先輩が「うーん」と、腕を組んだ。

「なんか、さみしげだなあ」

「大丈夫。ペチュニアは摘心で大きく育つし、ペチュニアもペンタスも挿し芽で増やせるんだよ」

ほんわかせんばいはマジショー先輩に、からのビニールポット四つに赤玉土を入れるよう頼んだ。

「お母さんがやってただけど、摘心っていうって、脇芽が出ている枝を切ると、本体の枝が増えて花が多く咲くようになるんだって。」

その切った枝は、挿し芽にするの」

と言いながら、剪定バサミでペチュニアの枝を五センチメートルほど切った。

「つぼみも切っておいたほうがいいんだって」

あつと思つた瞬間、パチンッと挿し芽のつぼみが切られた。② ぼくの背中にひやつとしたものが走る。

「あの、なんでつぼみを切ると、いいんですか？」

思わず聞くと、ほんわかせんばいが顔を上げた。

「つぼみがあると、花を咲かすほうに栄養が使われるの。挿し芽を育てるには根を伸ばすほうに栄養をまわしたいから、つぼみをのぞくんだって」

「はあ……」

ぼくはあいまいにうなずいた。本当はそんな答えを聞きたかつたわけじゃない。

この花は突然、ここに連れてこられた。そのうえ、これから咲こうとしていたつぼみの命まで勝手に奪われた。ちよつとひどくないか？ 買い主は買ったモノに対して、なにをしてもいいのか。この花を、そのまま育ててやるわけにはいかないのか。

ほんわかせんばいは同じようにいくつか枝を切ると、マジショー先輩が用意したビニールポットに枝を挿して、ジョウロでたっぷり水をかけた。

「これを明るい日陰に置いて育てるの。だいたい二週間か三週間で根が張るから、そしたら、花壇に植えるんだって」

「へえー」と、みんなの声が重なった。

ほんわかせんばいは、持っていたジョウロを花壇の脇に置いた。

「予算は限られているから、いろいろ工夫しないとね」

「さ、どんどん植えてこう！」

川口センパイが花壇の縁に足をかけたそのとき、ふとまゆセンパイが正門から出てきた。花壇を見て、目をかがやかせる。

「おー、いいじゃん。おれも植えたい」

「しかたがないなあ」

川口センパイは笑いながら、ふとまゆセンパイにペチュニアのビニールポットを手わたした。ふとまゆセンパイが茶道の作法のように、ビニールポットを回して眺める。

「かわいいー。この子はやさしげな感じだから、優花にしよう」

「ちよっとお、その子はうちの子なんだから、勝手に名前をつけないでよ」

川口センパイが **A** をとがらせると、ふとまゆセンパイは、

「名前をつけたって、いいじゃんねー？」

と、そばにいたぼくに同意を求めた。

えっ、ぼくにふるの？

ぼくはどきまぎして「あ、はあ」と、言葉にこした。

「んじゃ、植えよっか」

ふとまゆセンパイがしゃがんで、移植ゴテで土を掘りだした。ぼくもとなりにしゃがんで穴を掘る。ふとまゆセンパイはビニールポットから苗を出して、掘った穴に置いた。「地面と水平になっているよね？」と、ぼくに聞く。

「あ、はい。なっていると思います」

「よっしゃ」と言って、ふとまゆセンパイは苗のまわりに土をかけた。仕上げに手でそっと土をおさえる。同じように、ぼくも苗を穴に置いて土をかけた。

「うん、いいんじゃない？」

ふとまゆセンパイが顔を上げて、ぼくを見た。マスクに目をとめる。

「それ、花粉症？」

「あ、はい。※アレルギーで、ハウスダストとかもダメなんです」

ふとまゆセンパイがうなずいた。

「そっかあ。園芸作業は花粉とか土ぼりとか吸うことになるから、気をつけなきゃな。つらいときは遠慮しないで、作業をやめていいからね」

ぼくは、マスクの中でぽかんと口を開けた。

こんなことを言われたのは、はじめてだった。「つらいときは、やめていい」という言葉が、じわじわと胸の奥にしみていく。

「水、くんできました」

近藤先輩の声に、ぼくははっと我にかえった。

ふとまゆセンパイが立ちあがって言う。

「じゃんじゃん撒いちゃって」

ふとまゆセンパイにならって、ぼくも歩道に下がった。水を撒く近藤先輩やしんちゃん先輩を見守る。

花壇は夕焼けのオレンジ色に染まっていた。全体的に土の面積が広くて、花はちよぼちよぼっという感じだけど、こんな状態でいいんだろうか？

ほんわかせんぱいは花壇を眺めて、満足そうにうなずいた。

「育つのが、楽しみだね」

うんうんと、川口センパイたちもうなずく。

本当に見栄えがよくなるほど育つの？ 育たなかったら、ぼくたちのせいだよな。

さみしげに植わっている花に、どうも気持ちがすっきりしない。③ 心の中でどんな、もやもやしたものがふくらんでいく。

たかが植物なのに、そう思えない。どこか自分に似ているような気がして、ぼくは花を単なるモノとして見るができなかった。

《注》 ※アレルギーで、ハウスダストとかもダメなんです——この発言は嘘であり、実際は「ぼく」にアレルギーはない。

問一 空欄 **A** **C** にあてはまる最も適切な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、符号を書きなさい。

イ 胸 □ 眉 ハ 頭 ニ 肩 ホ 腰 ヘ 腹 ト 耳 チ 口

問二 波線部 a c の意味を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、符号を書きなさい。

a 「鵜呑みにした」

イ うまい言葉にだまされた □ よく考えずそのまま受け入れた ハ 疑いながらも聞き入れた

ニ 気分を害さないようにした ホ 意見を認めつつ批判した

b 「相づちを打った」

イ 言葉をさえぎった □ こびを売った ハ 調子を合わせた ニ 口答えをした ホ つつしんで答えた

c 「言葉をにこした」

イ 意見に同調した □ 暴言をはいた ハ 相手を無視した ニ 落ち着きを失った ホ うやむやにした

問三 空欄 ① にあてはまる言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号を書きなさい。

- イ あつかましい優越感　□　ちっぽけな違和感　ハ　でたらめな罪悪感
ニ　ゆがんだ距離感　　ホ　うすつぺらい正義感

問四 傍線部②「ぼくの背中にひやつとしたものが走る」とありますが、これはなぜですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号を書きなさい。

- イ 買い主は買ったモノになにをしてもいいのだという先輩の意見を聞き、その傲慢さに驚いたから。
ロ 挿し芽を育てるにはつぼみを切るべきだ、という先輩の知識は間違っていることに気づいたから。
ハ 先輩の行為は、これから咲こうとしていたつぼみの命を勝手に奪う、ひどいものだと思ったから。
ニ ためらうことなくつぼみを切る先輩の様子を見て、栽培委員会に入ったことを後悔し始めたから。
ホ 今から花が咲くつぼみを切ると、さみしげな花壇の様子が、さらにさみしげになってしまうから。

問五 傍線部③「心の中でどんどん、もやもやしたものがふくらんでいく」とありますが、ここでの「ぼく」の心情を、百二十字以内で説明しなさい。

問六 「ぼく」が「マスク」をつけているのは何のためですか。四十字以内で説明しなさい。

〈四十五点〉

《三》次のⅠ・Ⅱの問いに答えなさい。

Ⅰ 次の①～⑩の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 観光業を国のキカン産業に育てていく。
- ② リーグ戦を勝ち抜き、シユクガンであったベスト8進出を果たした。
- ③ 彼がのこした功績は、マイキヨにいとまがない。
- ④ 町工場のロウレンな技術者達が力を結集した。
- ⑤ 創業以来のロゴマークをサツシンする。
- ⑥ カキュウの用件で、先方から呼び出される。
- ⑦ 店の理念を毎朝全員でショウワしている。
- ⑧ 多様な人間関係の中でショセイ術を身に付ける。
- ⑨ 「お父様はソクサイでいらつしゃいますか」ときかれた。
- ⑩ 前会長のセンオウな振る舞いを、長年許してきてしまった。

Ⅱ 次の⑪～⑮が、下の四つの言葉全てと似通った意味の語になるように、空欄を漢字一字で埋めなさい。

- ⑪ 青□　——　《ひよっこ・駆け出し・若造・ビギナー》
- ⑫ 理想□　——　《常若の国・樂園・極楽・ユートピア》
- ⑬ 徒□　——　《ただ働き・無駄足・骨折り損・シジフオスの岩》
- ⑭ 発□　——　《興起・猛り立つ・張り切る・ハッスル》
- ⑮ 動□　——　《動因・理由・きっかけ・モチーフ》

$$\begin{array}{c} \rhd \\ \longrightarrow \\ \lhd \end{array}$$

問
一

得 点

問二

問三

問四

[illegible]

70字

問五

--	--

問六

80字

一 小 計

問七

①	
②	
③	
④	らない
⑤	

らない

問
一

問
一
一

a
b
c

問
三

101

問四

1001

問五

[illegible]

40字

120字

二 小 計

問六

三 小 計	

三 小 計

$$\begin{array}{c} \text{---} \nearrow \text{---} \\ \text{---} \searrow \text{---} \\ \text{---} \end{array}$$

⑪	⑥	①
⑫	⑦	②
⑬	⑧	③
⑭	⑨	④
⑮	⑩	⑤

三 小 計